2017年度授業改善研修参加レポート　　所属（　経済　　）　氏名　塩津　ゆりか

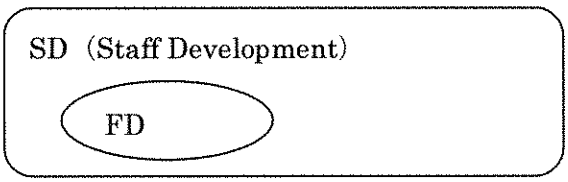
「研修会等名称」
第２３回FDフォーラム
ＦＤのこれまでと、これから～多様な角度からＦＤについて考える～
場所：京都産業大学
期間：２０１８年３月３日

１．研修の内容

FD義務化から10年経過した今、一部にはFD活動そのもののルーティン化が見られ、また「学びはよくなったのか」という根源的な課題がある。そこで、これまでの各大学の多様な取り組みを振り返り、全国的・政策的な視点、国際的な視点、現場の視点など立場の違うシンポジストの多角的な視点から話題提供がなされた。

全国的・政策的な視点として、文部科学省　林　剛史氏からは次の５点の報告がなされた。

１．大学も小泉内閣当時の規制改革に相当の影響を受けた
２．FD活動の対象者として、将来、大学教員を目指す大学院生や職員をも対象とすべきFDセンターの役割として、授業内容の改善、職員の職能開発の必要性
３．教職協働の必要性
組織体として学長を支える仕組み作りが重要である。
右図のとおりFDはSDの中の一部分として関係づけられることから、FDだけでなく、SDも力を入れていくべきである。



４．教員の本務は、教育研究活動である。
５．今後、リカレント教育を充実させるため、Non-Degree Programをいかに設計すべきか検討が必要。また、高等教育無償化の４条件が大学にとって受け入れがたいことは理解している

大学経営者の視点として学校法人京都橘学園理事長　梅本　裕氏から、授業評価アンケートの寿命は５年で、それ以上はルーティンになってしまうこと、ルーブリックはまだ工夫の余地があることが報告された。

大阪大学の佐藤　浩章氏は、未来の大学教員をスーパー講師、アクティブラーニング・ファシリテーター、社学連携コーディネーター、学習コーチの４類型に分類し、授業はスーパー講師によるオンライン配信を行い、実験。実習はアクティブラーニング・ファシリテーターが担い、実務家教員が社学連携コーディネーターを、学習コーチはオンライン授業の履修が計画通りに進んでいるかをチェックする役割を果たせばよいとの論を展開されていた。

現場の視点として、関西大学　森　朋子氏は大学の最終的な目的が学生の学びの質の向上であるならば、従来型のFD研修会開催や授業公開だけでなく、教学IRやピアサポートプログラムの開発なども推進していくことが重要であると述べていた。関西大学A学部での取り組みとして、学部とは毛利した教育推進部に専任教員を配置し、学部と協働で学生アンケートを実施し、教育推進部が統計分析を行い、G1「低学習意欲群」G2「学習意欲・他者観察低調群」G3「能動的学習群」G4「受動的学習群」G5「高学習意欲群」に分類し、つまづきの大きい科目を履修するG1、G2に対してピアサポートを導入した結果、スタディスキルや他者観に大幅な改善が見られたとのことであった。

2．研修の成果

関西大学　森先生からご提案のあった、次の点を学んだ。

これまで

- FD という概念の理解
- 学生への視点
- 学習の視点
- 社会への説明責任

これから

- 内部質保証システムの構築
- 学修成果の可視化
- FD の実質化
- 教育のブランディング化
- 担い手としての SD
  - UEA（University Education Administrator）
  - ポスドク
  - 院生

すでに明らかになっていることは共通化すること（クローズドエンド）が望ましいが、固有の課題解決に向けては個別化（オープンエンド）すべきである。

本学経済学部の状況を鑑みると、上記のこれまでの FD 活動にとどまっている。今後は、教職協働を推進していく必要性があることや FD の実質化となるよう、また、UEA をはじめとした、専任の専門家の登用を求めたい。

3．授業への研修成果の反映状況

３月３日実施の研修であったため、次年度以降に反映できるよう努力したい。